

# 「張 貽芳 医案集」

## 出版によせて

あっという間に日本にやってきて27年になりました。

母と共に『医案集』を出版することは私の子どもの時からの願望でした。しかし思うばかりで行動することなく今に至っていることをとても申し訳ない気持ちでいました。

子どもの時から母に対しての認識があります。彼女の学術は博大精深的なものです。医療経験も天才的で、どんな難しい病気でも母の診療を受けると必ず有効であることが当然です。富士山がそこに存在し、江戸川がそこに流れるように自然天成です。一つの岩石、草、花で飾る必要がありません。四季の春の風、冬の雪の自然転換がそなわるように彼女は医学の天才であります。これが私の母に対する敬意です。

若い頃、彼女は周恩来総理の指名で世界のたくさんの国々へ伝統医学を教えに行きました。院長になってからも中国医学の研究と中国医学の人材育成に一生懸命努力してきました。私の印象の中で彼女はいつでも変わらず平常心を持ち、謙虚に教えを続けてきました。その頃の母の患者さんは実は国のリーダーであり、ハイレベルの役職の人が多いにも関わらず、驕ることなく勤勉に仕事をしてきました。

病気は精神的な原因で邪気が多いと捉えます。彼女の中医思想の診療を受けたらどんな難しい病気でも治ることを私は体験してきました。それは母個人の魅力と言えます。

ある患者さんはこれまでの針治療で全身の針の穴を集めれば蜂の巣のような感じです。飲んできた漢方薬は10頭の牛を育



てる程大量です。でも良好な結果が出ません。

彼女の最初の処方が一番安い方法で一番少量の漢方薬で60年以來、数えきれない程の患者さんが助かりました。

3年前に母の学術継承人の蘭才博士と編集部の人達で母の『医案集』の企画、出版の活動が始まりました。その時、母の同級生の屠 呦呦教授がノーベル賞を受賞しました。良い時期が来たと感じました。2014年の一番暑い季節の中で両親はお弟子さん達と『医案集』の仕事を始めました。

ところが最悪のことが発生しました。出版の仕事で一番緊張感がある時期に父親は下半身不随で動けなくなりました。母の漢方薬を飲みながら私の外気施術を受けて半年後に奇跡的に81歳の父は手術をしないで快復しました。今は杖もなく自由自在に動けます。私は気功の凄さと母の医学思想の正確さに驚きました。



私も医学大学院を卒業しました。父の体調の原因で私は年間7回中国に帰りました。

子どもの時から母について毎日病院に行く環境にありましたから医学経験もさせてもらいました。それは日本にやって来てからもその勉強は続いています。

私の住んでいる所は真間山です。真間山の下に流れる川は真間川と言います。

母の医療経験はとても“真”です。ですから真間の“真”に合います

気功の門に入るとあなたは赤い太陽が見えます。それも“間”の意味です。残りは青山と清流の川ですから恐ろしいものはありません。

この本は大勢の人に幸福と快樂を与えます。

母は私に教えてくれました。

医者になると3つの境界があることを。

「医者になりたい。」「医者になることが恐ろしい。」「医者になりたくない。」

子どもの時はその意味が分かりませんでした。

この本を読むと少し分かるようになりました。

子どもの時は良い医者になると、意志满满です。

医者になると薄い氷の上を歩くように恐ろしかったです。

初めての夜勤の時、心臓病の患者さんが運ばれて来ました。私は手が震えて良い方策が出てきません。

夜中の2時に私は母に電話しました。母は「心臓に気をかけて‘寛胸丸’を飲めば治ります。」と指示してくれました。

母の最上の願望は『医者はいらない。』です。世界中のすべての人が医者になることです。

母の弟子の蘭才博士は「この本があれば患者さんは病院に来なくても大丈夫。その漢方薬を飲めば治ります。」といました。

私の娘も今、北京大学で医者になる勉強をしています。娘が医者になると7代目の医者になります。

7月2日に母は80歳で中国国医名師になりました。それは中国最高名誉の医師です。

母は私の目の前の高い山です。

その山を乗り越えることが私のあこがれであり、夢です。

日本于雷気功研究会会長・于雷総合氣氣功院 院長 于雷

平成29年 7月 3日